

⑫ 公開特許公報 (A)

昭57—156418

⑤ Int. Cl.³
A 61 K 31/70
// C 07 H 19/04

識別記号
ADU

庁内整理番号
6675—4C
7252—4C

⑬ 公開 昭和57年(1982)9月27日

発明の数 1
審査請求 未請求

(全 5 頁)

⑭ 制癌剤

① 特 願 昭56—41109

② 出 願 昭56(1981)3月19日

⑦ 発 明 者 吉田登
大阪市東淀川区東淡路1丁目5
番3—618号

⑦ 発 明 者 中村誠

宝塚市売布2丁目14番7号

⑦ 発 明 者 荻野重男

西宮市飯岩町5—30—202

⑧ 出 願 人 住友化学工業株式会社

大阪市東区北浜5丁目15番地

④ 代 理 人 弁理士 木村勝哉

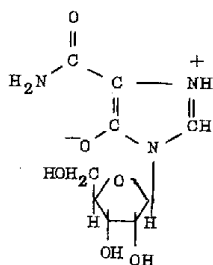
明 細 書

1. 発明の名称

制癌剤

2. 特許請求の範囲

下記式で示される α -カルバモイル- β -D-リボフラノシル-イミダゾリウム-5-オレイトまたはその塩を主成分とする制癌剤。



3. 発明の詳細な説明

この発明は、 α -カルバモイル- β -D-リボフラノシル-イミダゾリウム-5-オレイトまたはその塩を主成分とする制癌剤に関する。

本発明化合物は、ヌクレオチド抗生物質ブ

レティニンとして公知のものであり、例えばジャーナル・オブ・アンティビオティクス (J. Antibiotics) 27巻、775ページ (1974年) 記載の方法によって醗酵生産され、また薬学雑誌 (Chem. Pharm. Bull.) 23巻、245ページ (1975年) 記載の方法によって化学合成もされ得る。

α -カルバモイル- β -D-リボフラノシル-イミダゾリウム-5-オレイトは、抗生物質としての活性は限定的であり、むしろ免疫抑制作用物質として機能することが見い出されてきており、その他の生物活性としてL-5/78Y細胞毒性が知られているにすぎず、それが有意な制癌作用を有することは全く知られていなかったが、当該発明者らは各種実験腫瘍、例えばエーリッヒ癌、マウス白血病P388、ルイス肺癌、マウス結腸癌コロノ26などを用いて該化合物の制癌活性を詳細に検討し、投与方法の工夫により、該化合物に著しい制癌作用があり、さらには骨髓抑制作用等を検討し、多くの汎用制癌剤に見られる骨髓抑制という副作用が該化

表一 / 腹水型マウスエールリッヒ癌に対する延命効果

1) 延命率 (T/C%) ²⁾	投与方法	投与スケジュール ³⁾	1) 延命率 (T/C%) ²⁾
1)	投与方法	投与スケジュール ³⁾	1)
800	腹腔内投与	Day / のみ / 回 ³⁾	99
400	"	"	91
200	"	"	98
88	"	Day / より / 日 / 回、9日間	99
44	"	"	103
22	"	"	99
100	"	Day / のみで 3時間毎8回	>188
50	"	"	129
25	"	"	139
400	経口投与	Day / より / 日 / 回、9日間	毒性により全死
200	"	"	54
100	"	"	179
50	"	"	147
25	"	"	126

注 1) Day 0³⁾にマウス / 匹当り 10⁶ 個のエールリッヒ癌細胞を腹腔内に移植し、24時間後 (Day /) より治療を開始

2) (薬剤投与群平均生存日数 / 対照群平均生存日数) × 100 %

3) Day 0 は腫瘍移植日、Day / は腫瘍移植翌日を示す。

合物にはきわめて微弱であることを証明し、該化合物が臨床的にきわめて有用な制癌剤であることを初めて見出した。

なお、本化合物は水に易溶であり、各種剤型変換の可能性を有しており、毒性も弱く、腹腔内投与のみならず静脈内投与、経口投与によって各種実験腫瘍に対し、広い用量域で制癌作用のあることが当該発明者らによって証明され、制癌剤として優れた特性を有するものである。

以下、本発化合物の制癌作用、毒性等を示す。

(1) 制癌作用

本化合物の各種実験腫瘍に対する制癌作用を応用薬理4巻(1970年)、521ページおよびキャンサー・トリートメント・レポート(Cancer Treatment Report)3巻パート3(1972年)、1ページに記載された方法に準拠して調べた。

結果を表一 / 、2に示す。

(3)

表一2 マウス白血病P388に対する制癌効果

投与量 (mg/kg/day)	投与方法	投与スケジュール	延命率(T/C%)
100	経口投与	Day / より / 日 / 回、9日間	>130
50	"	"	125

表一 / からわかるように該化合物は腹腔内 / 回投与あるいは腹腔内9日間連続投与では全く制癌効果を示さないが、Day / のみに3時間毎8回の極端な腹腔内頻回投与を行うだけで、あるいは9日間の連続経口投与を行うことにより、著しい延命効果をもたらすことが見い出された。また、表一2からわかるように経口投与により同系腫瘍であるマウス白血病P388に対し有意な延命効果が見られた。

このような経口投与あるいは頻回投与による制癌活性の増強は、エールリッヒ癌、マウス白血病P388のみならず、サルコーマ180、皮下型ルイス肺癌、マウス結腸癌コロニ26などにおいても認められ、該化合物の制癌活性が投与経路および投与スケジュールに著し

(4)

く依存していることが判明した訳であり、これらの知見をもとに該発明者らは本発明を完成した。

すなわち従来単なる連日腹腔内投与では、制癌効果が発現し得なかった4-カルバモイル- α - β -D-リボフラノシル-イミダゾリウム-5-オレイトを経口投与とするか、あるいは頻回持続投与とするかにより各種実験腫瘍に対し有意な制癌活性を発現せしめることに成功したのである。

さらに各種実験腫瘍の試験管内細胞増殖におよぼす該化合物の増殖抑制効果を調べたところ、表一3のとおりであり、該化合物がきわめて低濃度で腫瘍細胞に対し直接的に作用することを証明した。

表一3 各種実験腫瘍に対する細胞増殖阻害効果

腫瘍細胞	IC ₅₀ (mM) ¹⁾
エールリッヒ癌	3.5×10^{-4}
マウス白血病P388	2×10^{-3}
サルコーマ180	1.5×10^{-3}

注 1) 5% CO₂、37℃、48時間培養後の50%増殖阻止濃度を示す。

(2) 急性毒性

使用動物；マウス ICR-JCL 系、雄、
体重 22～25g (n=6)
但し、動物は薬剤投与後 9 日間観察した。
結果を表-4 に示す。

表-4 マウスに対する急性毒性

投与経路	LD ₅₀ 値
経口投与	> 5000 mg/kg
腹腔内注射	> 5000 mg/kg
静脈内注射	> 1500 mg/kg

(3) 骨髄抑制作用

健康な ICR-JCL 系マウス(雄、体重 22～25g)に対し、該化合物を 500 mg/kg となるよう経口および腹腔内注射により投与し、経口的にマウス(ノ群 3 匹)を屠殺し、大腿骨中の有核細胞数を計測したが、投与直後に一過性の僅かな細胞数の抑制が見られたのみであり、数日後には無処置マウスとほぼ同数の骨髄細胞が認められるまでに完全に復帰し、該化合物による骨髄細胞への影響はほとんど

(7)

適当な休薬期間を設け、持続投与を続けることにより、連日一定量投与を継続する場合よりも宿主に対する障害度が低く、かつ著しい制癌効果を各種腫瘍に対して示す特性が見い出された。

また、本剤は従来化学治療が困難とされた固型癌に対し、上記のような強力な効果を発揮し、なおかつ経口投与可能な制癌剤が少い現状において、上記のように経口投与によってもすぐれた制癌効果を示すものであり、きわめて有用かつ画期的な制癌剤として、人癌の治療にも用いられ得る。

本剤は静脈内注射、皮下注射、経口等の方法で投与され、成人の治療に用いられる場合の投与量は、投与経路および投与回数により異なるが通常ノ日 0.5～ノ日 0.8 の範囲が望ましい。

本発明の 4-カルバモイル- α -D-リボフラノシル-イミダゾリウム-5-オレイトは遊離の形でも水溶性にすぐれており、したがって剤型変換の可能性が大きく、任意慣用の方法で投与用に調製することができる。

(9)

見られなかった。

なお、対照として 6-メルカプトプリン (60 mg/kg、腹腔内注射) 投与マウスでは、投与後 1 週間を経過しても無処理マウスの 50% 以下の骨髄細胞しか認められず、薬剤の影響から完全に復帰する為には投与後約 4 週間の休養期間が必要であった。

以上の実験例から明らかなように本発明の 4-カルバモイル- α -D-リボフラノシル-イミダゾリウム-5-オレイトは、例えばエールリッヒ癌のような異系腫瘍のみならず、マウス白血病 P 388、ルイス肺癌、マウス結腸癌コロノ 26 などの従来難治性とされている同系腫瘍に対しても、経口投与あるいは頻回持続投与といった投与方法の工夫により、強力な制癌作用を示し、また急性毒性試験等から解るように非常に安全性が高く、さらには汎用の制癌剤の多くが有する骨髄抑制作用がきわめて軽微であり、長期使用に際しても副作用の出現の恐れが少い、きわめて優れた制癌剤である。本剤は

(8)

従って、この発明は人体用医薬として好適な、少なくとも本発明化合物またはその製薬上許容し得る塩を含有する製剤組成物を包含するものである。このような組成物は任意所要の製薬用担体あるいは賦形剤により、慣用の方法で使用に供される。

この組成物は胃腸管からの吸収に好適な形態で提供されるのが望ましい。経口投与用の錠剤およびカプセルは一定量投与形態であり、結合剤例えばシロップ、アラビアゴム、ゼラチン、ソルビット、トラガカントまたはポリビニルピロリドン、賦形薬例えば乳糖、砂糖、とうもろこし澱粉、りん酸カルシウム、ソルビットまたはグリシン、潤滑剤例えばステアリン酸マグネシウム、タルク、ポリエチレングリコールまたはシリカ、崩壊剤例えば馬鈴薯澱粉あるいは許容し得る湿潤剤例えばラウリル硫酸ナトリウムのような賦形剤を含有していてもよい。錠剤は当業界で周知の方法でコーティングしてもよく、必要に応じて着色剤、矯味剤などを加えること

(10)

ができる。経口用液体製剤は水性または油性懸濁液、溶液、シロップ、エリキシル剤その他であってもよく、あるいは使用する前に水または他のビヒクルで再溶解させる乾燥生成物であってもよい。

このような液体製剤は普通に用いられる添加剤例えば懸濁化剤例えばソルビットシロップ、メチルセルロース、グルコース／糖シロップ、ゼラチン、ヒドロキシエチルセルロース、カルボキシメチルセルロース、ステアリン酸アルミニウムゲルまたは水素化食用脂、乳化剤例えばレシチン、モノオレイン酸ソルビタンまたはアラビアゴム、非水性ビヒクル例えばアーモンド油、分別ココナツ油、油性エステル、プロピレングリコールまたはエチルアルコール、防腐剤例えばp-ハイドロキシ安息香酸メチル、p-ハイドロキシ安息香酸プロピルまたはソルビン酸、場合によっては色素、香料を含有してもよい。

注射用組成物は一定投与量アンプルあるいは

(/ 1)

製剤例 1 注射剤

滅菌 4-カルバモイル- α -D-リボフラノシル-イミダゾリウム-5-オレイト 250 mg を含有するようにバイアルに無菌的に分配し、密封して水分およびバクテリアを除去した。使用前にリドカイン 0.5 % 注射液 2 ml を添加して注射剤とする。

製剤例 2 注射剤

滅菌 4-カルバモイル- α -D-リボフラノシル-イミダゾリウム-5-オレイト 塩酸塩 250 mg を含有するようにバイアルに無菌的に分配し、密封して水分およびバクテリアを除去した。使用前にリドカイン 0.5 % 注射液 2 ml を添加して注射剤とする。

製剤例 3

- | | |
|--|--------|
| 1 . 4-カルバモイル- α -D-リボフラノシル-イミダゾリウム-5-オレイト | 250 mg |
| 2 . マンニト | 200 mg |
| 3 . 馬鈴薯でんぷん | 47 mg |
| 4 . ステアリン酸マグネシウム | 3 mg |

(/ 3)

添加防腐剤、適当な溶解補助剤と共に多投与量容器中に提供される。組成物は懸濁液、溶液、油性または水性ビヒクル中の乳液のような形態であってもよく、懸濁化剤、安定化剤および(または)分散剤のような処方剤を含んでいてもよい。一方、活性成分は使用する前に適当なビヒクル例えば発熱物質不含の滅菌した水で再溶解させる粉末であってもよい。

これら組成物およびその可溶性塩は投与方法により 0.1 % 以上、好ましくは 10 ~ 60 % の活性物質を含有することができる。組成物が一定投与量からなる場合には、50 ~ 2000 mg の活性成分を含有するのが好ましい。

本発明の 4-カルバモイル- α -D-リボフラノシル-イミダゾリウム-5-オレイトを静脈内投与する場合には、遊離形のままあるいは該化合物を塩の形、例えば塩酸塩とするのが好ましい。

この発明の製剤例をいくつかあげる。

(/ 2)

1 および 2 を混合し、3 を 10 % でんぷん糊として加えて粒状化した。この粒子を No. 60 メッシュ (B.B.) ふるいを通し、乾燥して一定の重量とし、No. 16 メッシュ (B.B.) のふるいでふるった。次にこの粒子を 4 と混合してなめらかにし、7/16" パンチで圧縮して各錠 500 mg の錠剤とした。

製剤例 4 坐剤

- | | |
|--|---------|
| 1 . 4-カルバモイル- α -D-リボフラノシル-イミダゾリウム-5-オレイト | 500 mg |
| 2 . タンニン酸 | 30 mg |
| 3 . ロートエキス | 20 mg |
| 4 . イクタモール | 200 mg |
| 5 . アミノ安息香酸エチル | 100 mg |
| 6 . カカオ脂 | 1500 mg |

1 ~ 5 と 1/3 量の 6 を研和して坐剤塊とし、次に 2/3 量の 6 を熔融したもの (30 ~ 35 °C) を加え、かき混ぜながら放冷固化する直前、粘稠となった時速やかに坐剤型に注入して冷却した。型からとり出した坐剤に直ちに

(/ 4)

タルク末を散布し、うすい硫酸紙またはパラフィン紙あるいはスズ箔で包装した。これらの他本剤は任意慣用の方法により軟膏、舌下錠などの形にも製剤し得る。

(/ 5 完)

DERWENT-ACC-NO: 1982-94144E

DERWENT-WEEK: 198244

COPYRIGHT 2008 DERWENT INFORMATION LTD

**TITLE: Antitumoural agents contain nucleotide
antibiotic bredinin**

INVENTOR: NAKAMURA M; OGINO S ; YOSHIDA N

PATENT-ASSIGNEE: SUMITOMO CHEM CO LTD[SUMO]

PRIORITY-DATA: 1981JP-041109 (March 19, 1981)

PATENT-FAMILY:

PUB-NO	PUB-DATE	LANGUAGE
JP 57156418 A	September 27, 1982	JA

APPLICATION-DATA:

PUB-NO	APPL-DESCRIPTOR	APPL-NO	APPL- DATE
JP 57156418A	N/A	1981JP- 041109	March 19, 1981

INT-CL-CURRENT:

TYPE	IPC DATE
CIPP	C07H19/052 20060101
CIPS	A61K31/70 20060101
CIPS	A61K31/7042 20060101

CIPS	A61K31/7052 20060101
CIPS	A61K31/7056 20060101
CIPS	A61P35/00 20060101
CIPS	C07H19/04 20060101

ABSTRACTED-PUB-NO: JP 57156418 A

BASIC-ABSTRACT:

Antitumoral agents contain nucleotide antibiotic bredinin (i.e. 4-carbamoyl-1-beta-D -ribofuranosylimidazo-5-oleate) or its salts.

Bredinin is active against various experimental tumours such as Ehrlich tumour, mouse leukemia P388, Lewis lung cancer, and mouse colon cancer 26 with very slight inhibition to the bone-marrow. For example, the rate (T/C%) of increase of life-span against Ehrlich ascite tumour in mice was 99% at a dose of 800 mg/kg a day, 91% at 400 mg/kg and 98% at 200 mg/kg in i.p. administration, and 54% at 200 mg/kg for 9 days, 179% at 100 mg/kg, 147% at 50 mg/kg and 126% at 25 mg/kg in oral admin.

TITLE-TERMS:	ANTITUMOUR AGENT CONTAIN NUCLEOTIDE ANTIBIOTIC BREDININ
ADDL-INDEXING- TERMS:	CARBAMOYL RIBOFURANOSYL IMIDAZO OLEATE

DERWENT-CLASS: B03

CPI-CODES: B02-B; B12-D02; B12-G05; B12-G07;

CHEMICAL-CODES: Chemical Indexing M2 *01* Fragmentation
Code F011 F012 F013 F014 F015 F019
F113 F522 H2 H211 H4 H403 H422 H481 H8
J0 J011 J3 J311 J5 J521 K0 L8 L812 L821
L834 L9 L941 M280 M311 M321 M342 M373
M391 M413 M510 M522 M530 M540 M640
M650 M781 P431 P632 P633 V0 V020 V761